

1 学校紹介

本校は、明治7年に設立され、今年度で創立150周年を迎える。本多忠勝の居城であった大多喜城を中心に形成された城下町にある、歴史と伝統のある学校である。

学校教育目標「夢や希望をもち、元気に学ぶ児童の育成 ～ふるさと 大多喜 大すき～」の下、大多喜城を望む校舎で、223名の児童が学んでいる。

2 研究主題

主体的に考え、表現する児童を育成するための授業改善の在り方

－「読むこと」における言葉による見方・考え方を働かせた実践を通して－

3 研究の概要

（1）児童の実態と課題

ア これまでの研究から

本校では、令和3年度から国語科「読むこと」における「考えを形成」するための指導方法を研究し、考えを引き出したり、もたせたりする指導方法について追究してきた。その結果、考えを広げ深める指導方法に課題があることが明らかとなった。

イ 全国学力・学習状況調査の結果から

令和4年度及び5年度の全国学力・学習状況調査の結果を分析すると、記述式の設問の正答率が特に低く、指導事項別に見ると、人物の相互関係や人物像・全体像を読むこと、自分の考えをまとめることに課題があった。それらを「読むこと」の学習過程に当てはめて分析したところ、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」に課題があることが明らかになった。

ウ 指導の実態から

研究推進委員会を中心とする話し合いの中で、国語科では「資質・能力の系統を意識した授業ができていない」という指摘があった。算数科の場合には、教師が、これまでの既習を想起させる発問をするなど、資質・能力の系統を意識して指導にあたる姿が見られ、児童も既習を活用しながら、資質・能力を身に付けている。

しかし、国語科の場合には、教師が資質・能力の系統を意識して指導することが十分ではなかったことが明らかになった。児童の視点では、学年が変わっても国語科の学習は教材が変わるだけで自分にどのような力が身に付いたのかよくわからないと感じているのではないかという実態が指摘された。（図1）



図1 国語の授業の実態

(2) 学力向上のための取組

ア 研究仮説

資質・能力の系統を捉え^①、「言葉による見方・考え方」を働かせて読む^②ことで、主体的に考え、表現することができるだろう。

(仮説について)

①資質・能力の系統を捉える

「資質・能力の系統を捉える」とは、教師が、資質・能力の系統を捉えて指導にあたること、児童が単元で身に付ける資質・能力を捉えて学ぶことを表す。学習の系統性を重視することで、資質・能力を螺旋的・反復的に繰り返して指導し、定着させることをねらいとした。(図2)

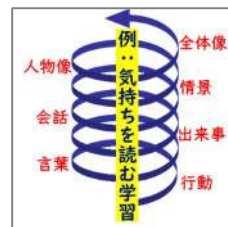


図2 気持ちを学ぶ学習の系統性

②「言葉による見方・考え方」を働かせて読む

「言葉による見方・考え方を働かせる」とは、教師が見方・考え方を捉えて指導すること、児童が見方・考え方を働かせて読むことを表す。そうすることで、身に付ける読み方を明確にし、児童の学びの自覚を促すことをねらいとした。

イ 授業改善の視点

- ①資質・能力の明確化
- ②「言葉による見方・考え方」の把握
- ③「言葉による見方・考え方」を基にした振り返り

ウ 『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』との関連

「見いだす」場面では、資質・能力を明確にすることで、学習の見通しをもたせる。「自分で取り組む・広げ深める」場面では、「言葉による見方・考え方」を働かせることで、主体的な読みを目指す。「まとめあげる」場面では、「言葉による見方・考え方」を基にした振り返りを行うことで、働かせた「見方・考え方」を自覚させ、次の学習に活かせるようにする。(図3)



図3 『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム』との関連

エ 具体的な手立て

① 学習系統表の作成

単元で身に付けたい資質・能力や働かせたい見方・考え方を系統表にまとめ、指導に活用している（図4）。この系統表を活用することで、教師は指導の視点を明確にし、児童は読みの視点や身に付けた既習の読み方を自覚した上で、学びに向かうことをねらいとした。

国語科「読むこと」学習系統表								
説明的な文章								
学年	教材名	学習事項	言葉による見方・考え方	学習用語	学年	教材名	学習事項	言葉による見方・考え方
第1学年	くらげ	「問い」と「答え」を探えて読む	「問い」の文と「答え」の文		第4学年	思いやりデザイン／アップとルーズで伝える	筆者の考えを捉える	「初め」と「終わり」に書かれた筆者の考え・具体例
	うみのかくれんぼ	読んで確かめる	何が書いてあるか・大事な言葉			パンフレットを読む	パンフレットの読み方	知りたいことに合わせて読む・作成の目的と伝えたい相手
	じどう車くらべ	順序に気をつけて読む	説明の順・まともなことの読み分け			世界にはこんな国と	要約する	まともなことの中心となる語や文・短くまとめる
	どうぶつのおもちゃ	比べて読む	比べて読み、特徴の違いなどを考える			ワナギのなぞを巡って	感じ方の違いに気づき、よさを見つける	文章をどう受け止め、どう理解したか・自分の考えとの違いの原因・他の人の感じ方のよさ
第2学年	たんぼぼのちえ	説明する文章を読む	順序やわけ	筆者	第5学年	見立てる／言葉の意味が分かること	要旨を捉える	「初め」や「終わり」の役割・事例と理由・考えの進め方
	どうぶつ園のじゅうい	読んで、考えをもつ	誰が何をしたか、何があったか・読んで分かったこと、自分の知っていること			新聞を読む	新聞の読み方	見出しやリード文・書かれた目的、読み手
	鳥のおもちゃの作り方	説明のしかたに気をつけて読む	文章のまともな「まず」「次に」などの言葉・絵や写真が、文章のどこを説明しているか			国語が教えてくれること	文章以外の資料を効果的に用いる	文章と対応させる
	おにごっこ	大事な言葉や文を見つける	何について書かれた文章か・自分の知りたいこと			想像力のスイッチを入れる	自分の考えを明確にし、伝え合う	自分の知識、経験と重ねる・筆者の考えと事例・感じ方の違い
第3学年	言葉で遊ぶ／こまを楽しむ	段落とその中心を捉える	「初め」「中」「終わり」・「中」の例に照らし合わせる・「中」の例に照らし合わせる・「中」の例に照らし合わせる	段落・問いの文・キャッチコピー	第6学年	笑うから楽しい／時計の時間と心の時間	筆者の主張と、それを支える事例を捉える	筆者の主張と事例・自分の経験や知識と関係付けて読む・事例があげられている意図
	ポスターを読む	ポスターの読み方	言葉と写真や絵の関わり・目的や、知らせたい相手			利用案内を読む	利用案内の読み方	知りたいことを選んで読む・複数の情報を組み合わせて読む
	ずるたまかえる大豆	話題と、例の書かれ方を捉える	「初め」「中」「終わり」・「中」の例に照らし合わせる・「中」の例に照らし合わせる・「中」の例に照らし合わせる			鳥獣戯画を読む	筆者の考えと表現の工夫を捉える	筆者の伝えたいことと、資料の使い方・筆者が着目している事柄・筆者が説明に用いている言葉
	ありの行列	説明する文章を読んで、感情を伝え合う	初めて知ったこと・もっと知りたいと思ったこと・自分の考えと同じところ、違うところ			メディアと人間社会／大切な人と深くつながるために	複数の文章を読んで考えたことを交流する	考えの述べ方の共通点や相違点・筆者の主張と、自分と重ね合わせる

図4 国語科「読むこと」の学習系統表

② 学習計画表の活用

学習の見通しをもたせるため、単元のはじめに児童と立てた学習計画を大型提示装置に示した（図5）。学習計画に身に付けたい資質・能力と既習の読み方を示し、この単元で働かせる「言葉による見方・考え方」を書き加えることで、新たな学びの習得を自覚させることをねらいとした。

図5 大型提示装置に示した学習計画表の例

③ わかぎっ子「読み方」JUMP

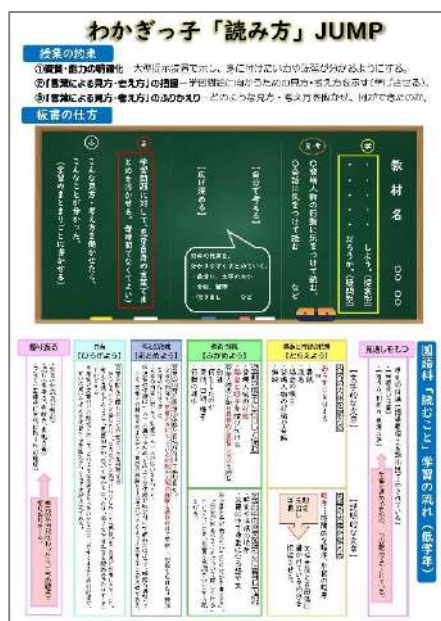


図6 【わかぎっ子「読み方」JUMP】

本校で取り組む学習指導方法を「わかぎっ子『読み方』JUMP」としてまとめた(図6)。国語科の授業を担当する教師が、これを基に指導を展開することで、全校で統一された指導がなされ、どの学級においても、また、児童が次の学年に進んでも、資質・能力を身に付けやすくすることをねらいとしている。

「わかぎっ子『読み方』JUMP」には、本研究における授業改善の視点を、授業の約束として示している。また、授業改善の視点である、言葉による見方・考え方を働かせるための板書例を示している。さらに、「読むこと」の指導事項と学習過程を、「学習の流れ」としてまとめ、低・中・高学年ごとに身に付ける資質・能力とその指導過程を明確にしている。

(3) 加配教員(学習サポーターを含む)の活用

本校では、第3学年以上の学級に配置し、国語科の学習において個別指導を充実させてきた。本研究の中心は「読むこと」の領域であるが、それにとどまらず、国語科全体の指導の充実を図ってきた。

4 成果

児童のノートには、自分がどのような見方・考え方を働かせ、その結果何ができるようになったのかについて振り返る記述が多く見られるようになってきた(図7)。このことから児童が、資質・能力を意識して学びに向かっている様子がうかがえる。

系統表や「わかぎっ子『読み方』JUMP」を活用することで、資質・能力を意識した授業改善がなされている。また、職員室では、国語科の授業づくりについての話題が増え、授業改善の意識が高まっている様子が見られる。

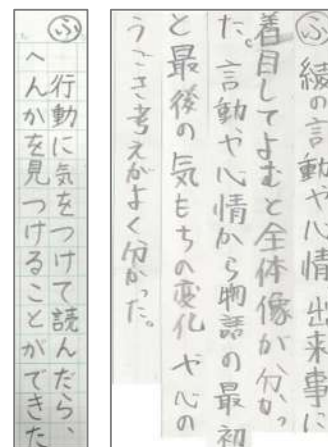


図7 児童の振り返り(左:第3学年 右:第5学年)

5 今後の課題

資質・能力を系統的に身に付けさせるために、今後も継続して取り組んでいくことが求められる。また、児童のノートには、資質・能力に沿った振り返りが書かれているものの、それが身に付いているかは定かではないため、資質・能力が定着しているのかどうかを見取っていく必要がある。児童の振り返りについては、書くことが目的になっているため、今後は、書いた振り返りを次の学習に繋げられるようにするための手立てを検討する必要がある。それにより、資質・能力の系統性を生かした学びの充実を図っていきたい。